Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2008, Vol. 55, 27 − 45.

対人的拒絶研究の概観

—実験社会心理学領域を中心に—

岡田　涼[1)]　　中山留美子[1)]

はじめに

日常において，他者からの拒絶を経験することがある。仲間集団への参加を拒まれたり，親しかった友人から無視されたり，あるいは好意を伝えた異性に気持ちが受け入れられないこともある。他者との関係は，拒絶を経験する可能性を常に内包している。このような他者からの拒絶は非常に嫌悪的な出来事として経験され，人はそれに対して様々な反応を示す。

今日の社会的問題を考えるうえで，対人関係の側面を看過することはできない。特に，多くの問題の背景に他者からの拒絶を想定することができる。例えば，Leary, Kowalski, Smith, & Phillips (2003) は，学校での銃乱射事件に関して，その事件を起こした青年の大部分が事件前に何らかのかたちで拒絶を経験していたことを報告している。また，Parker & Asher (1987) は，メタ分析によって，児童期に他者から拒絶されたものは，成人後に抑うつや精神障害などの心理的問題を抱えやすく，非行や犯罪などの反社会的な行動を起こす率が高いことを明らかにしている。対人関係に起因する様々な問題の生起過程を考えるとき，他者からの拒絶に注目することは有意義な視点となり得る。

近年，他者からの拒絶に関して，多くの実験社会心理学的な研究が行われている。一連の研究から，拒絶が行動や感情にどのような影響をもたらすか，またどのようなメカニズムで影響するかについての知見が蓄積されてきている。しかし，他者からの拒絶に関する研究は，多岐にわたる方面で行われており，研究知見の整理が十分になされていないのが現状である。

本論文では，他者からの拒絶に関する近年の研究知見を概観し，整理することを目的とする。まず，他者からの拒絶に関する概念とその定義の問題について論じる。次に，他者からの拒絶を捉えるいくつかの理論的枠組みを紹介する。その後，実験場面における様々な拒絶の操作方法を紹介し，拒絶が及ぼす影響について概観する。最後に，今後の課題について論じる。なお，本論文では，他者からの拒絶に関わる現象を“対人的拒絶”という用語で統一して記述する。

対人的拒絶の概念

一般に，対人的拒絶 (interpersonal rejection) とは，相手から無視されたり，自分の申し出が断られたり，あるいはグループから仲間はずれにされたりする状況を指す。また，異性に対する想いが受け入れられない場合や，保護者から愛情を注がれていない状態を拒絶として言及することもある。対人的拒絶といった場合には，かなり広範囲に及ぶ現象が含まれる。

これまでの研究文脈では，拒絶 (rejection)，排斥 (exclusion)，追放 (ostracism)，放棄 (abandonment)，片思い (unrequited love) など様々な用語や概念を用いて対人的拒絶に関する現象が検討されてきた。これらの用語のなかで，もっとも頻繁に用いられてきたのは拒絶，排斥，追放である (Leary, 2005)。研究者によって好んで用いる用語は若干異なるものの，それぞれ明確な弁別がなされず互換的に用いられているのが現状である。Leary (2001) は，これらの対人的拒絶に関する概念に共通する要素として，関係評価の低さがあるとしている。関係評価 (relational evaluation) とは，相手との関係に価値があり，その関係を重要で親密なものとみなしている程度のことである。すなわち，他者から無視される場合や仲間はずれにされる場合，あるいは恋愛感情が受け入れられない場合のいずれに関しても，相手が自分に対して十分な価値や親密さを感じていないというところに共通点があり，関係に対する相手からの評価の低さが，対人的拒絶を特徴づけているのである。

対人的拒絶を関係評価の観点から捉えることの利点の1つは，拒絶に関する現象に程度という幅をもたせられることである。関係評価は他者が自身との関係に価値をおいている程度であり，その程度には状況によっ

1）日本学術振興会・名古屋大学大学院教育発達科学研究科

Table 1　拒絶と受容の連続体（Leary, 2001をもとに作成）

関係評価	地位	定義
高	最大限の受容	他者は個人を求める努力をする
↑	積極的な受容	他者は個人を歓迎する（しかし，積極的には求めない）
	消極的な受容	他者は個人が受容されるのを許可する
中	アンビバレンス	他者は個人が受容されるか拒絶されるかを気にしない
↓	消極的な拒絶	他者は個人を無視する
	積極的な拒絶	他者は個人を避ける
低	最大限の拒絶	他者は個人を物理的に拒絶する

てばらつきがあると考えられる。したがって，関係評価の観点を用いることで，「拒絶されたか否か」ではなく，「どの程度拒絶されたか」という議論が可能になるのである。Leary（2001）は，最大限の拒絶（排斥）から最大限の受容（包含）までの段階を設定し，この段階を関係評価の程度として捉えている（Table 1）。実際に，拒絶から受容までを連続的に変化させ，その効果を検討した研究もみられる（Buckley, Winkel, & Leary, 2004, Exp. 1; Leary, Haupt, Strausser, & Chokel, 1998; Williams, Cheung, & Choi, 2000, Exp. 1）。Leary et al.（1998）は，大学での指導教官や初対面の異性から評価される場面を想定させ，その評価の程度を否定的なものから肯定的なものまで連続的に変化させることで拒絶の程度を操作している。

また，対人的拒絶を考えるうえで，実際の客観的な行動に焦点をあてるか，あるいは他者の行動に対する主観的な知覚に焦点をあてるかが問題となることがある。しかし，関係評価の観点から捉えた場合，相手が自分との関係に対して価値をおいていないということを当人が認知しなければ，対人的拒絶が当人の行動や感情に対して何らかの影響を及ぼすとは考えにくい。そのため，対人的拒絶に関しては，他者からの拒絶を主観的に知覚した状態として扱う方が有意義であろう。

以上をふまえ，対人的拒絶の暫定的な定義を以下のように考えることができる。すなわち，「他者が自身との関係に価値や重要性，親密さを感じていないと知覚した程度を反映する対人関係の状態」である。

対人的拒絶の理論

対人的拒絶が及ぼす影響やそのメカニズムについては，様々な観点から理論化が試みられてきた。ここでは，代表的なものとして，所属欲求理論，ソシオミーター理論，社会的追放のモデル，社会的監視システム，社会的傷み理論，自己本位性脅威モデルを取り上げる。

所属欲求理論

原始社会において，人類は他種に比べて非力な種であったため，単独で生活することが難しく，社会集団を形成する必要があった。このような状況にあって，集団に所属することは生存にとって不可欠であるため，ヒトは集団に所属したいという欲求をもつようになり，その形質が現在まで受け継がれている。Baumeister & Leary（1995）は，このような欲求を所属欲求（need to belong）と呼んでいる。所属欲求は，「最低限の数の対人関係を形成し，維持したいという欲求」である。この欲求は人間の進化に根ざしているため，文化や時代を超えて普遍的かつ基本的なものであるとされている。また，Baumeister & Leary（1995）は所属欲求の充足が感情や認知，適応，達成行動など様々な側面と関連することを仮定している。この仮定は，他の多くの理論や研究知見でも支持されている（Buhrmester, 1996; Deci & Ryan, 2000; Hazan & Shaver, 1994; Mikulincer, Florian, & Hirschberger, 2004; Sheldon, Elliot, Kim, & Kasser, 2001）。

対人的拒絶は所属欲求を脅かすものである。他者が自身との関係を低く評価することで，その他者との関係や集団に所属していられなくなる危険性が高まる。集団への所属が危うくなると，生存にとって不利な状況に陥るため，そのような状況を導く対人的拒絶は感情面や行動面，認知面での反応を引き起こすのである。

ソシオミーター理論

所属欲求理論で想定されているように，他者から受容され，集団に所属し続けることは，生存にとって不可欠である。そのため，自分の所属の状態を常に知っておく必要があり，人は受容と拒絶を感知するための心的装置を発達させてきた。ソシオミーター理論（sociometer theory: Leary, 2008; Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995）では，自尊心がこの機能を果たしているとしている。他者から受容された場合には自尊心が高揚し，逆に拒絶された場合には低下するが，この自尊心の変動に

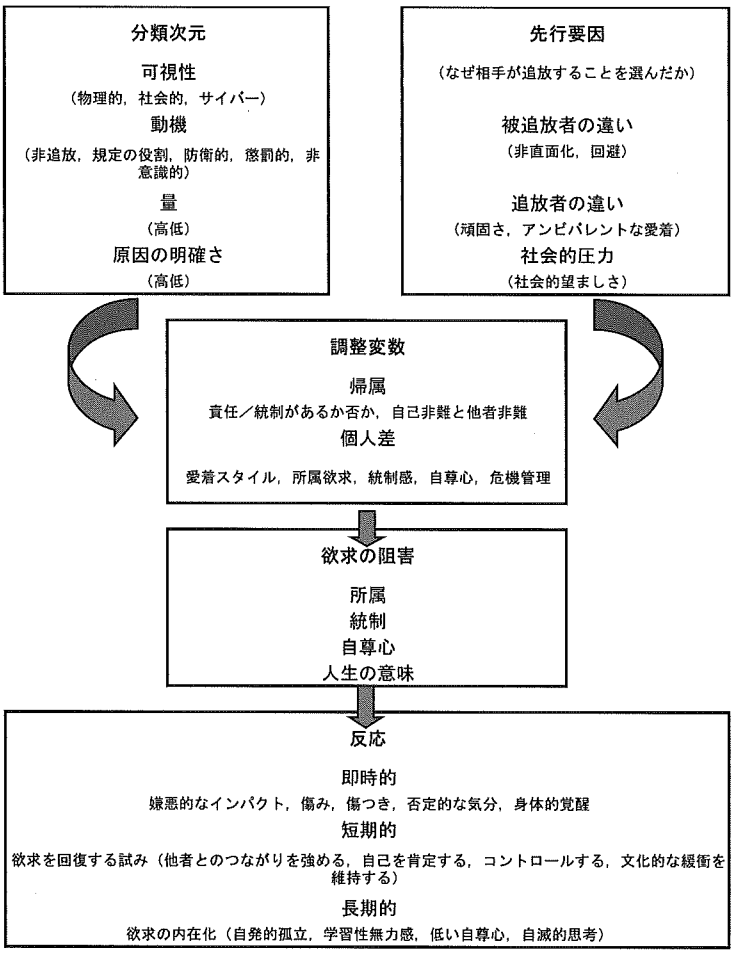

Figure 1　追放のモデル（Williams & Zadro, 2005をもとに作成）

よって自身の所属の程度を知ることができる。すなわち，自尊心は自分が他者から受容されているか拒絶されているかをあらわすソシオミーターなのである。自尊心の低下によって自分が拒絶されていることを知覚すると，自己呈示や自己高揚的な行動をとることで，所属の状態を回復しようと動機づけられる（Leary, 2004b, 2008）。

ソシオミーター理論は多くの実証研究で支持されている（Leary, 2004a）。Leary et al.（1995）は，大学生に対して，過去に経験した出来事について，どの程度受容や拒絶を感じたかと，その出来事に際してどの程度自尊心を感じたかを尋ねている。その結果，受容された出来事ほど自尊心が高く，拒絶された出来事ほど自尊心が低かった。また，拒否児は概して全体的自己価値が低いことや（Harter, Whitesell, & Junkin, 1998; Verschueren & Marcoen, 2002），孤独感と自尊心との間に負の関連があるという知見（Mahon, Yarcheski, Yarcheski, Cannella, & Hanks, 2006; Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004）も，ソシオミーター理論を支持するものとして考えることができる。

ソシオミーター理論の考え方では，自尊心そのものは追求すべき目的ではなく，あくまで所属の程度によって生じる心理状態であることになる。この捉え方は，自尊心そのものに対する欲求を仮定する理論的立場（Case & Williams, 2004; Maslow, 1968; Tesser, 1988）とは大きく異なっており，ソシオミーター理論の独自な点であるといえるだろう。

社会的追放のモデル

Williams & Zadro（2005）は，追放という用語を用いて対人的拒絶の先行要因から結果要因までのプロセスをモデル化している（Figure 1）。このモデルの骨子は，追放の影響は人がもつ基本的欲求が阻害されることで生じるという仮定にある。ここで想定されている基本的欲求

とは，他者と相互作用したいという所属（belongingness）の欲求，環境や関係をコントロールしたいという統制（control）の欲求，自分の生活に意味を見出したいという意味ある存在（meaningful existence）の欲求，自分に価値を感じたいという自尊（self-esteem）の欲求の4つである。対人的拒絶は，これらの欲求を阻害することで，様々な社会的行動を引き起こす（Case & Williams, 2004）。また，追放のタイプに関して可視性，動機，量，原因の明確さという4つの観点から分類できることを示している。追放という現象が生じる先行要因としては，追放する側とされる側の要因と，社会的圧力など第三者の要因の影響を仮定している。

追放がもたらす影響に関しては，即時的な影響，短期的な影響，長期的な影響が想定されている。個人が追放を知覚した直後においては，基本的な欲求が阻害されたことによって，身体的な覚醒が高まると同時に傷みの感情や否定的な気分が生じる（即時的影響）。その後，基本的欲求を回復しようとして，様々な対処行動をとる（短期的影響）。所属欲求の場合であれば，他者とのつながりを思い出すなどの認知的方略や，他者に同調するなどの行動的方略を用いて，所属の回復に努めることになる。しかし，これらの対処行動がうまくいかず，基本的欲求が阻害された状態が続くと，その状態が内在化してしまう（長期的影響）。所属欲求が阻害された状態が続くと自ら孤立するようになり，統制の欲求が阻害されていると学習性無力感が生じるなどがその例である。

社会的追放のモデルは，すべての部分が実証的に検討されているわけではないが，追放のタイプから先行要因や調整変数まで，対人的拒絶に関わるプロセスを包括的に捉えている。また，所属欲求理論（Baumeister & Leary, 1995）だけでなく，存在脅威管理理論（Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 2004）や学習性無力感理論（Peterson & Seligman, 1994）など，複数の理論で想定されている概念を包含してモデルを構成している点が特徴的である。

社会的監視システム

ソシオミーター理論では，人は自分が他者から受容されているか拒絶されているかの状態を常に監視していることが想定されていた。Pickett & Gardner（2005）は，この点を発展させた社会的監視システム（social monitoring system）を提唱している。社会的監視システムは，個人の主観的な受容度が低いときに活性化され，所属の状態を回復するのに必要な情報に個人の注意を向けさせることを目的としている。

Gardner, Pickett, & Knowles（2005）は，社会的監視システムによって，所属の状態が調整されるプロセスをFigure 2のようなモデルとして捉えている。まず，人は自身の所属の状態を査定する。そこで受容されていると判断すれば調整のプロセスは停止するが，十分に受容されていないと判断すると，社会的監視システムが働き，対人的な手がかりや社会的な環境に対する注意や意識が過敏になる。その時点で他者と肯定的な相互作用をもつことができれば，その相互作用を通じて所属の状態を改善しようとするが，不可能な場合には，それまで個人が形成してきた社会的絆の表象に頼ることになる。社会的絆の表象を利用できるときは，親しい他者の写真を眺め

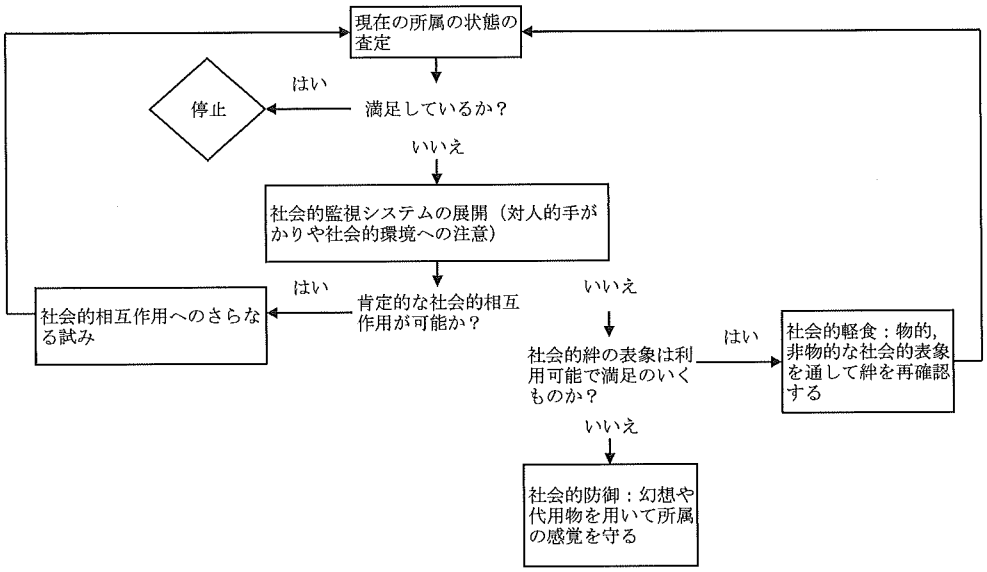

Figure 2　所属の調整の拡張モデル（Gardner et al., 2005をもとに作成）

たり，メールを読み返したりすることで所属状態を再考する（社会的軽食: Gardner et al., 2005）。そのような表象を利用することができないときは，テレビ番組の登場人物や架空のキャラクターに愛着を抱くなどの方法で所属の感覚を守ろうとする（社会的防御: Cole & Leets, 1999）。

社会的監視システムは，ソシオミーター理論をより精緻化したものとして考えることができ，社会的軽食や社会的防御など，所属欲求が充足されない場合の補償的な行動を説明することを可能にしている。しかし，このモデルを支持する知見はまだ少なく，さらなる実証的な知見が必要である。

社会的傷み理論

所属欲求が進化の過程に根ざしたものであるとすれば，その阻害は個人にとって非常に苦痛なものとして感じられるはずである。MacDonald & Leary（2005）は，対人的拒絶を知覚したときに生じる情動的反応を社会的傷みとして捉え，社会的傷み理論（social pain theory）として定式化している。この理論では，対人的拒絶は物理的な損傷による傷みの感覚と同じシステムによって媒介されるため，拒絶を経験したときに苦痛な情動的反応が生じることを想定している。物理的な損傷の際に生じる傷みは，疼痛感覚（pain sensation）と傷み感情（pain affect）という2つの成分からなる。疼痛感覚は，特定の傷み受容器によって収集され，脊髄後角を通して脳に送られる感覚であり，組織の損傷に関する情報を与える。傷み感情は，疼痛感覚に付随して生じる不快感情や予想される疼痛感覚に対して生じる不快感情であり，嫌悪的な状態を知らせる役割がある。この感情は，嫌悪的な状態を引き起こしている源を攻撃したり，それから逃避したりする行動に動機づける機能をもっている。対人的拒絶は，この傷み感情を刺激するために，否定的な感情が経験されるのである。

対人的拒絶による傷みと物理的損傷による傷みとの類似性は，生理的なメカニズムが共有されていることによって生じることを示す知見がある。Eisenberger, Lieberman, & Williams（2003）は，実験場面で対人的拒絶を経験しているときには，背側前帯状皮質が活性化することを報告している。この前帯状皮質は，物理的な損傷に関する信号を処理する部位であることが知られている。

社会的傷み理論は，対人的拒絶という心理的な経験を，生理学的な観点から説明している点に独自性がある。このことによって，対人的拒絶に際して生じる感情や行動を，物理的な嫌悪刺激に対する接近反応や回避反応といった適応維持のための行動との類似性から理解することが可能になる。

自己本位性脅威モデル

対人的拒絶は自己評価を脅かす要因ともなり得る。Baumeister ら（Baumeister, Smart, & Boden, 1996；Bushman & Baumeister, 1998）が提唱する自己本位性脅威モデル（threatened egotism model）では，非現実的に高揚されたり，不安定・不確かであるような高い自己評価と他者からのネガティブな評価とのギャップが自我脅威として認識されることにより，その後の認知，感情が導かれ，行動が動機づけられるというプロセスが想定されている。他者からの拒絶は，対人能力に関する高い自己評価との間にギャップを生み，自我脅威をもたらすと考えられる。

このモデルによれば，自我脅威に対して（自己評価を防衛するために）他者評価を否定するという対処方略を選択したとき，多くの場合，怒りや他のネガティブな感情が引き起こされる（評価を受け入れた場合には自己評価が低下し，感情反応は強く起らない：Figure 3）。そし

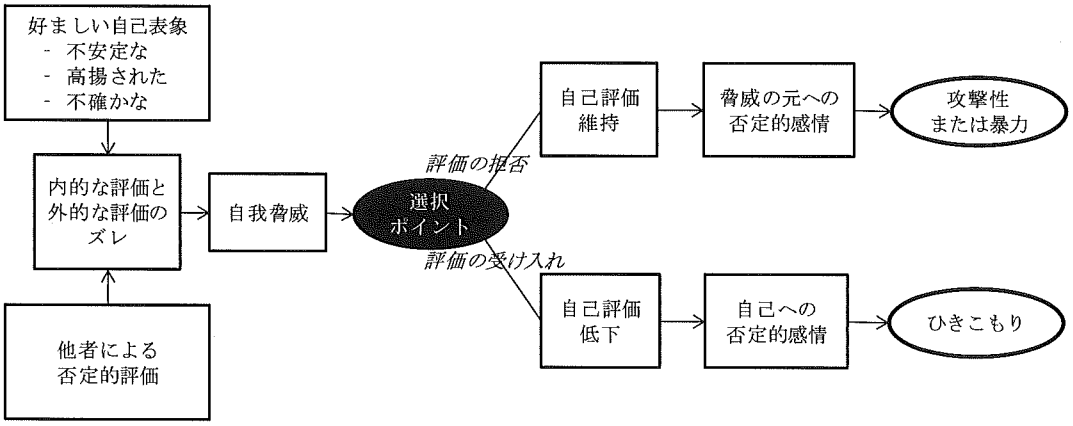

Figure 3　自己本位性脅威モデル（Baumeister et al., 1996をもとに作成）

て，引き起こされた怒りや攻撃的反応は，たいていの場合ネガティブな評価をした人に向けられる。Baumeister et al.（1996）によれば，評価者への攻撃的反応は，評価を拒否し，防衛するための手段であると同時に，他者に対する支配や優越性を達成する手段ともなる。

Twenge & Campbell（2003）は，自己愛者が，社会的拒絶を受けた後，拒絶した他者に対して（直接的攻撃），または第三者に対して（転移性攻撃：displaced aggression）攻撃的な行動をとることを示している。自己本位性脅威モデルは対人的拒絶を中心に扱うモデルではないが，拒絶を含めたネガティブなフィードバックに対して，自己評価を維持しようとする動機・行動が生起するとする考えや，その動機の結果としての攻撃的な行動を説明している点において独自性があるといえる。

対人的拒絶の操作方法

対人的拒絶に関する研究では，実験場面において様々な方法で参加者に拒絶を経験させ，その際の反応を調べる方法がとられている。対人的拒絶の効果は，受容条件や統制条件との比較によって検討されている。もっとも多く用いられている操作方法は，他者からの選択による方法，パーソナリティ・テストによる方法，ボール・トスによる方法の3つである。ここでは，代表的な対人的拒絶の操作方法を紹介し，各方法の特徴をいくつかの観点から比較する。

他者からの選択

他者からグループのメンバーとして選択されることは，自分が受容されていることを伝える。その一方で，自分が選ばれなければ，他者が自分との関係を望んでいないと知覚させるため，拒絶を感じることになる。

Leary et al.（1995, Study 3）は，他者からメンバーとして選ばれるか否かという点から，対人的拒絶の操作を行っている。参加者は初対面の他者4人と同時に実験に参加する。最初に，実験の後半で行う作業のグループを作るための情報として，自身の特徴を知らせる質問紙に回答する。参加者は，この質問紙への回答に基づく他者からの選好によってグループが決定されると告げられる。その後，実験者から条件ごとに異なるフィードバックが与えられる。受容条件では，他者から選ばれたため3人で残りの作業を行うことが告げられ，拒絶条件では，誰からも選ばれなかったため一人で作業を行うことが告げられる。また，類似の方法として，Bourgeois & Leary（2001）は，面接で情報を得たあと2人のリーダーが自分のチームのメンバーを選んでいき，そのとき最初に選ばれるか最後に選ばれるかによって操作している。また，異性の参加者が自分ともう1人の参加者のいずれを選ぶかで操作する方法（Ayduk, Gyurak, & Leurssen, 2008），別室の参加者がインターフォン越しに自分の話ともう1人の参加者の話のいずれを聞くかで操作する方法（Snapp & Leary, 2001）などがある。

パーソナリティ・テスト

対人的拒絶の背景には関係評価の低さを想定することができるが，この関係評価の低さは特定の他者に限定される必要はない。対人関係全般において，自分に価値がおかれていないと知覚すれば，やはり対人的拒絶を経験することになる。

Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke（2001, Exp. 1-3）は，パーソナリティ・テストを用いて対人的拒絶を操作している。参加者はEysenck Personality Questionnaire（Eysenck & Eysenck, 1975）に回答し，その結果として条件ごとに偽のフィードバックが与えられる。受容条件に相当する将来の所属（future belonging）条件では，参加者は生涯にわたってよい対人関係をもつことができると告げられる。一方，拒絶条件にあたる将来の孤独（future alone）条件では，参加者は孤独なままに人生を終えると告げられる。多くの場合，これら2つの条件に加えて，参加者が骨折をしたり，自動車事故に遭うことを告げる不幸（misfortune）条件が設定される。この条件は，拒絶の効果が単に否定的内容の影響ではないことを確認するためのものである。類似の方法に，カップル間の葛藤の原因となり得る行動や性格についての質問紙に回答させ，その得点が高いことを伝えるものもある（Murray, Rose, Bellavia, Holmes, & Kusche, 2002, Exp. 2）。

ボール・トス

対人的拒絶の1つの典型例は無視である。特に，追放という用語を用いる研究者は，対人的拒絶の操作において他者からの無視という側面を重視している（Williams & Sommer, 1997; Williams & Zadro, 2005）。他者からの無視による操作方法として，ボール・トスがある。最初にこの方法を用いたのはWilliams & Sommer（1997）である。この方法では，実験参加者は2人のサクラと一緒に参加する。実際の参加者と2人のサクラは，実験者からしばらく無言で待つように告げられ，同じ部屋に残される。しばらくして，サクラの2人はそこに置いてあったボールでキャッチボールを始めるが，このとき実験参加者にボールが投げられるか否かで条件が操作される。受容条件では，3分の1程度は実験参加者にボールが投げられるが，拒絶条件では，最初の数回ボールが投げられた以降まったくボールが投げられなくなる。このボール・トスによる拒絶の間，参加者は極めて否定的な反応を示す（Williams & Sommer, 1997）。また，無視という

形態での拒絶は，それを行うサクラにもかなりの負担が強いられる（Ciarocco, Sommer, & Baumeister, 2001）。日常の拒絶に関するエピソードでは，拒絶された側だけではなく拒絶する側にもかなりの心理的な負荷がかかることを考えると（Bratslavsky, Baumeister, & Sommer, 1998），この方法は他の操作方法よりも日常場面での拒絶経験により近いといえるかもしれない。その半面，実施上の倫理的な妥当性の問題に慎重である必要がある。

対面でのボール・トスに代えて，Williams et al.（2000）はインターネットを用いたサイバー・ボールの方法を開発している。この方法では，インターネット上で他の参加者（実際にはコンピューターによるプログラム）とボール・トスを行う。拒絶と受容の操作は，対面でのボール・トスと同様である。効果については，対面によるボール・トスと同じく，拒絶として知覚され，基本的欲求を低下させることが報告されている（Krill, Platek, & Wathne, 2008; Williams & Zadro, 2005; Zeigler-Hill & Showers, 2007）。このサイバー・ボールの方法は，対面ではないためにサクラ役を操作しやすいという利点がある。いくつかの研究で，サクラが内集団か外集団か（Gonsalkorale & Williams, 2006; Williams et al., 2000, Exp. 2），実際の人間かコンピューターによるプログラムか（Zadro, Williams, & Richardson, 2004, Study 1）などによる効果の違いについても検討されている。

その他の方法

以上の方法以外にも，様々な方法を用いて対人的拒絶の操作が試みられている。Sommer & Baumeister（2002）は，2つのプライミングによる方法を用いて潜在的な対人的拒絶の影響を検討している。1つは，コンピューターによって，“歓迎された”などの受容に関する単語と“無視された”などの拒絶に関する単語を閾下で呈示するという方法である。もう1つは，文章作成課題であり，4つの単語を用いて受容に関する文章と拒絶に関する文章を作成する方法である。また，Zadro, Williams, & Richardson（2005）は，3人掛けの椅子上で両端の2人が真ん中の参加者を無視して話し合う“O列車”という方法を用いている。他にも，他者が否定的な評価をしていることを伝えたり，想像させたりする方法（Leary, Gallagher, Fors, Buttermore, Baldwin, Kennedy, & Mills, 2003, Exp. 2; Leary et al., 1998），もう1人の参加者が対面するのを嫌がって立ち去ってしまったことを伝える方法（Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller, 2007, Study 4-5），実験参加者自身が過去に経験した拒絶関連の出来事を想起させる方法（Maner et al., 2007, Study 1; Pickett, Gardner, & Knowles, 2004, Study 2; Twenge & Campbell, 2003, Study 1）などがある。

対人的拒絶の操作方法を分ける次元

上述のように，対人的拒絶の操作方法には様々なものがある。これらの方法は，いずれも参加者に関係評価の低さを伝えるという点で共通している。しかし，その他の側面について考えた場合，それぞれ独自の特徴を有していると考えられる。

Leary（2005）は，対人的拒絶に関する用語や概念を4つの次元から分類することを試みている。1つ目の次元は，以前の所属状態（prior belongingness status）である。この次元は，対人的拒絶を経験する以前に，他者から受容されていたのか否かを弁別するものである。以前に受容されていた他者から拒絶されたのか，面識のなかった相手から拒絶されたのかには重大な相違がある。関係評価の観点からみると，その落差が大きい分，以前に受容されていた他者から拒絶される方がより否定的な効果が生じることが予想される。2つ目の次元は，評価のバレンス（evaluative valence）である。この次元は，拒絶される理由として個人が望ましい特徴をもっていたためか，望ましくない特徴をもっていたためかを弁別するものである。一般には，社会的スキルの不足など望ましくない特徴が拒絶につながることが多いが（Segrin & Kinney, 1995），その一方で他者より優れているなどの望ましい特徴をもっているために拒絶される場合もある。3つ目の次元は，行動面での回避（behavioral disassociation）である。この次元は，対人的拒絶に物理的な回避が伴うか否かを弁別するものである。明らかに無視される場合は行動面での回避が伴っているが，相手から無価値であると思われているのを知るだけであれば，必ずしも回避的な行動を伴わない。4つ目の次元は，比較的判断（comparative versus noncomparative judgment）である。この次元は，他者との比較によって拒絶されたのか，自分が絶対的に拒絶されたのかを弁別するものである。グループのメンバーを選ぶ状況で，メンバーの数に制限があれば，他者との比較によって受容されるか拒絶されるかが決まる。しかし，メンバーになり得る候補が1人だけであれば，その個人を絶対的な基準で判断したうえで受容されるか拒絶されるかが決まる。

この4つの次元に加えて，対人的拒絶を弁別するうえで，それがいつ生じる出来事であるかという次元も重要であると考えられる。現時点において拒絶を経験した場合と，今後拒絶されるであろうことを伝えて拒絶の感覚を喚起する場合では，拒絶に対する対処可能性という点で大きく異なる。現時点での拒絶には，すでに生じた出来事として事後的な対処を行うしかないが，今後予想される拒絶に対しては，それが生じないように予防的な対

Table 2　対人的拒絶の操作方法と分類次元

操作方法	以前の所属状態	評価のバレンス	行動的回避	比較的判断	拒絶の時期
他者からの選択	なし	—	あり	あり	現在
パーソナリティ・テスト	あり	—	なし	なし	未来
ボール・トス	あり	—	あり	あり	現在
プライミング	—	—	なし	なし	現在
O列車	なし	ネガティブ	あり	なし	現在
他者からの否定的評価	なし	ネガティブ	なし	なし	現在
他者の退去	なし	—	あり	なし	現在
過去経験の想起	あり／なし	ポジ／ネガ	あり／なし	あり／なし	過去

処行動をとる余地がある。また，過去に生じた対人的拒絶の経験を誘導し，その効果を検討することは，対人的拒絶による即時的な反応というよりは，むしろ個人のなかに内在化された拒絶の長期的な効果を検討していることになる。

Leary（2005）が指摘する4つの次元は，対人的拒絶に関する用語や概念を分類する次元である。実験操作の方法によって対人的拒絶の異なる側面が誘導されているとすると，これらの次元から操作方法を分類することもできる。Table 2に代表的な対人的拒絶の操作方法と，Leary（2005）による4つの次元および対人的拒絶の時期との対応を示す。全体的にみると，以前の所属状態，行動的回避，比較的判断の有無については弁別が可能であるが，評価のバレンスに関してはポジティブともネガティブとも判断できない操作方法が多い。つまり，実験参加者は理由を知らされずに拒絶を経験していることになる。そのため，自分が拒絶された原因を何に帰属するかの個人差によって，異なる効果を生じている可能性が残されている。また，拒絶の時期に関しては，ほとんどの操作方法が現時点で拒絶された場合の効果を検討している。将来における拒絶の可能性を喚起するパーソナリティ・テストや，過去の拒絶経験を想起させる方法は特殊であるといえる。

対人的拒絶の影響

所属欲求理論（Baumeister & Leary, 1995）で想定されているように，所属欲求は人間にとって基本的な欲求であり，一定の集団や社会的関係に所属していることは生存にとって不可欠である。そのため，所属欲求を阻害する対人的拒絶は，様々な反応を引き起こす。ここでは，対人的拒絶が行動面，認知面，感情面，自己調整に及ぼす影響について概観する。また，その影響を調整するパーソナリティ要因について論じる。

行動的側面

向社会的行動　他者との関係を築くことは，人の基本的な欲求である。そのため，対人的拒絶を経験した後には，所属の状態を回復しようと動機づけられ，向社会的な行動をとることが予想される。社会的追放のモデル（Williams & Zadro, 2005）や社会的監視システム（Pickett & Gardner, 2005）においても，対人的拒絶が関係回復的な行動を導くことが想定されている。

Maner et al.（2007）は，対人的拒絶が新たな他者との関係形成への動機づけを導くという社会的再結合仮説（social reconnection hypothesis）を検討している。他者からの選択やパーソナリティ・テスト，過去の拒絶経験の想起などによって対人的拒絶を経験したものは，新たな対人関係を築く機会に興味を示し，対面する機会がある他者に報酬を多く分配するなど，向社会的な行動を示した。また，ボール・トスによって拒絶を経験した場合に，他者への同調行動が増加し（Williams et al., 2000, Exp. 2），グループ活動での作業量が多くなること（Williams & Sommer, 1997）が報告されている。これらの知見は，対人的拒絶が向社会的行動を増加させる可能性を示唆しており，阻害された所属欲求を回復しようとする動機づけが喚起されている状態として理解することができる。

一方で，対人的拒絶が向社会的行動を低下させるとする知見も存在する。Twenge, Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Bartels（2007）は，他者からの選択やパーソナリティ・テストで対人的拒絶を経験した場合に，募金額や実験への自発的参加，囚人のジレンマゲームでの協同的な選択が減少することを明らかにしている。また，van Beest & Williams（2006, Study 2）は，ボール・トスにおいて最後にボールをもっていた場合に多くの報酬が得られるという条件において，対人的拒絶が募金額に負の影響をもつことを報告している。これらの知見は，対人的拒絶を経験することで，向社会的行動が減少する可

能性を示している。

攻撃行動　対人的拒絶は攻撃行動を高めることが示されている。Twenge et al.（2001, Exp. 4）は，他者からの選択を用いて対人的拒絶を操作し，自分のエッセイに対して否定的な評価を与えた他者（拒絶者とは別の人物）に対する攻撃行動を検討している。攻撃行動の指標は，不快な雑音をどの程度聴かせるかである。その結果，メンバーとして選ばれなかった参加者は，選ばれた参加者よりも攻撃行動が多かった。ここでの攻撃の対象は，自分のエッセイに対して否定的評価を行ったものであるが，拒絶は中立的な他者に対する転移性攻撃をも高めることが報告されている（Twenge et al., 2001, Exp. 5; Twenge, & Campbell, 2003, Study 4）。対人的拒絶が攻撃行動を高めるという結果は，パーソナリティ・テスト（Twenge et al., 2001, Exp. 1-3）やボール・トス（Chow, Tiedens, & Govan, 2008; Warburton, Williams, & Cairns, 2006）による方法でも確認されている。

攻撃行動は所属の状態を回復することにはつながらず，むしろさらなる拒絶を導く可能性が高い。そのため，拒絶経験後の攻撃行動の増加は，不適応的な反応であるといえる。Leary, Twenge, & Quinlivan（2006）は，対人的拒絶が攻撃行動を高めるメカニズムとして，①拒絶による苦痛が攻撃を高める，②拒絶による欲求不満が攻撃を高める，③拒絶による自尊心の低下が攻撃を高める，④拒絶によるネガティブ感情を改善するために攻撃が生じる，⑤社会的影響を与えるために攻撃を行う，⑥他者に対する効力感とコントロールを回復するために攻撃を行う，⑦拒絶に対する復讐として攻撃を行う，⑧拒絶が自己調整能力を反社会的行動への制約を弱めることで攻撃が生じる，⑨拒絶が自己統制を弱めることで攻撃が生じる，という9つのプロセスの可能性を指摘している。

認知的側面

他者認知　対人的拒絶を経験することで，他者に対する認知の仕方が違ったものとなる。ボール・トスや他者からの選択によって拒絶を経験した参加者は，拒絶者のパーソナリティを否定的に評価することが明らかにされている（Bourgeois & Leary, 2001; Buckley et al., 2004; Leary et al., 1995; Zadro et al., 2006）。

拒絶者以外の他者に対する認知は，肯定的であるとする知見と否定的であるとする知見の両方が存在する。例えば，Maner et al.（2007, Study 3-4）は，他者からの選択による方法と他者が立ち去ってしまったことを告げる方法で拒絶を操作し，拒絶を経験した参加者が，無関係な他者の社交性を高く評価することを報告している。しかし，Snapp & Leary（2001）では，聞き役のサクラが参加者の話よりも別室の他者の話を聞くという方法で拒絶を操作したところ，拒絶された参加者は，もう1人の参加者の好ましさを低く評定していた。

他者認知の好ましさは，評価される他者が拒絶者と同じグループとして認知されるか否かによるところが大きい。この点について，Gaertner, Iuzzini, & O' Mara（2008）は一体性の観点から検討している。他者から拒絶された参加者は，拒絶者だけでなく，拒絶者と同じバレーボール・チームのシャツを着ていた他の参加者に対しても攻撃を行った。拒絶者と一体性があると認知されることで，拒絶後の怒りや攻撃の対象となりやすいと考えられる。

対人的手がかりへの注意　社会的監視システム（Pickett & Gardner, 2005）で想定されているように，対人的拒絶によって阻害された所属欲求を回復しようと動機づけられる過程では，対人的手がかりへの注意が活性化される。Gardner, Pickett, & Brewer（2000）は，参加者に日記を読ませ，そこに書かれていた出来事を再生させた。その結果，拒絶を経験した参加者は社会的出来事の再生率が高かった。また，Pickett et al.（2004）は，他者からの選択や過去経験の想起によって拒絶を経験した参加者は，他者の表情を正確に読み取り，発話のトーンの処理能力が高まるなど，対人的手がかりに対して過敏になることを明らかにしている。

感情的側面

感情への影響　対人的拒絶は所属欲求を阻害するものであり，否定的な出来事として経験される。そのため，拒絶を経験したものは，ネガティブな感情を経験すると考えられる。Leary, Koch, & Hechenbleikner（2001）は，他者からの拒絶によって生じる感情として，悲しさ，孤独感，傷つき，嫉妬，罪悪感，恥，困惑，社会不安を挙げている。これらの感情は，ソシオミーターが関係評価の低下を察知したときにそれを知らせ，対人行動に動機づける機能をもつとしている。

しかし，実証研究においては，必ずしも対人的拒絶がネガティブな感情を高めることが示されているわけではない。感情の指標として用いられるのは，Positive and Negative Affect Schedule（PANAS: Watson, Clark, & Tellegen, 1988）やBrief Mood Introspection Scale（Mayer & Gaschke, 1988）などの自己評定尺度が多い。また，怒りや悲しみなどのカテゴリごとに感情を測定している研究もある。全般的な感情を扱った研究では，いずれの操作方法に関しても，条件間に差を見出している研究もあれば（Baumeister et al., 2005, Exp. 2; Gonsalkorale & Williams, 2007; van Beest & Williams, 2006; Williams et al., 2000），有意な差はないとする研究もある（Baumeister et al., 2002, Exp. 1; Briones, Tabernero, & Arenas, 2007; Manner et al., 2007, Study 3; Twenge, Baumesiter et al.,

2007, Exp. 1; Twenge et al., 2007, Exp.1; Zadro et al., 2004, Study 1)。一方，怒りや傷つき感情などの具体的な感情カテゴリについて検討した研究では，比較的拒絶の効果を見出している場合が多い（Bourgeois & Leary, 2001; Buckley et al., 2004; Chow et al., 2008; Rudman, Dohn, & Fairchild, 2007, Exp. 3; Zadro et al., 2004)。

感情に対する影響の非一貫性，特に対人的拒絶がネガティブな感情を高めないことに関して次の2つの可能性が考えられる。1つ目は，対人的拒絶はネガティブな感情を喚起するものの，主観的なレベルでそれを経験していないというものである。Blackhart, Eckel, & Tice (2007) は，ネガティブな感情の指標として唾液コルチゾール反応を用いて対人的拒絶の効果を検討している。その結果，他者からメンバーとして選択されなかった参加者は，コルチゾールの分泌量が増加し，生理的なレベルではネガティブな感情を経験していることが示された。2つ目は，対人的拒絶が感情に対する過敏さを麻痺させることで感情が喚起されにくくなるというものである。動物に共通する特徴として，分離や孤立が身体的な傷みを麻痺させることが知られている（MacDonald & Leary, 2005)。DeWall & Baumeister（2006）は，身体的傷みと社会的傷みが共通のメカニズムを共有しており，対人的拒絶は両方の過敏さを低下させる可能性を指摘している。実際，パーソナリティ・テストによって拒絶を経験したものは，身体的な傷みに対する閾値と耐性が高まると同時に，重要な出来事に対する感情反応が低下していた（DeWall & Baumeister, 2006, Exp. 3)。

感情の媒介効果　対人的拒絶がネガティブな感情を喚起するか否かとは別に，感情が対人的拒絶と行動との関連を媒介するか否かという問題がある。この点について，感情の媒介効果を見出している研究は少ない（Baumeister et al., 2005; Catanese & Tice, 2005; Williams et al., 2000)。現時点では，感情は対人的拒絶が行動的な反応を生じるメカニズムとして位置づけることは難しく，行動的反応に付随して生じる反応と考えるのが妥当である。

自己調整

集団に適応し，他者から受容されるためには，自身の欲求や衝動をコントロールし，状況に相応しいやり方で行動することが必要である。このような能力は，自己調整という観点から捉えられてきた。自己調整（self-regulation）とは，自分の思考や感情，行動を変更したり修正したりする能力であり，この能力によって不適切な衝動を抑制し，社会集団の基準に沿った行動をとることができる（Baumeister & DeWall, 2005)。

他者から拒絶されたとき，所属の状態を回復するためには，自らの欲求を抑えて集団の基準に沿った行動をとることが必要となる。すなわち，他者からの受容を得ようとする際に，より自己調整の必要性が高まるのである（Baumeister & Stillman, 2008)。しかし，いくつかの研究では，対人的拒絶が自己調整を阻害することが示されている。Twenge, Catanese & Baumeister（2002）は，パーソナリティ・テストによって拒絶を経験した参加者は，よりリスキーなくじを選択し，健康的な行動（健康食品を選ぶ，健康をチェックする質問紙に回答する，走った後に脈を測定する）よりも健康的でない行動（お菓子を選ぶ，雑誌を読む，休憩しながら脈を測定する）を選び，テストに対して遅延行動をとることを明らかにしている。他にも，拒絶経験後には，不可能課題への従事時間が短くなること（Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Twenge, 2005）や，困難な文章の再生などの意識的な思考を必要とする課題の成績が低下すること（Baumeister, Twenge, & Nuss, 2002）が明らかにされている。これらは，すべて拒絶が自己調整の能力を阻害することを示している。

このような自己調整の阻害は，他者からの拒絶と対人行動との関連を説明するメカニズムとなる可能性がある。例えば，攻撃行動の増加は，攻撃的な衝動を抑制していた自己調整の機能が対人的拒絶によって阻害されたためと考えることができる（Leary et al., 2006)。また，募金額や囚人のジレンマゲームでの協同的な選択が減少するなどの向社会的行動の低下は，自身を犠牲にして他者の利益を優先しようとする自己調整への動機づけが低下したためと解釈できる（Baumeister & DeWall, 2005)。しかし，自己調整を行う能力には個人差があり（Vohs & Baumeister, 2004），拒絶によって必ずしも自己調整が不可能になるわけではない。対人的拒絶がどのような行動を導くかには，自己調整の変動が関わっている可能性がある。

調整変数としてのパーソナリティ要因

対人的拒絶によりもたらされる影響は，パーソナリティ要因によって調整される。これまでの研究から，特性的自尊心，拒絶過敏性，自己愛などが，対人的拒絶の感じやすさや対人的拒絶による感情，行動の影響されやすさと関連することが明らかにされている。

特性的自尊心　自尊心が高い人（高SE者）は，他者の反応をよく捉える傾向や，他者が自分を受け入れてくれるという一般的な信念を持っていることが示されている（Leary et al., 1995)。自己確証理論（Swann, Chang-Schneider, & Angulo, 2008）からは，自尊心の低い人（低SE者）が，低い自己評価を確証させる批判的，拒絶的なフィードバックをポジティブなフィードバックよりも

好むことが予想される（Swann, Pelham, & Krull, 1989）。ここから，特性的自尊心が，対人的拒絶の感じやすさや対人的拒絶を感知した後の反応に影響することが示唆される。

Baumeister, Tice, & Hutton（1989）は，低SE者が対人的拒絶に対して特に過敏であることを指摘している。これに関し，Nezlek, Kowalski, Leary, Blevins, & Holgate（1997, Exp. 2）は，低SE者が排斥の実験的操作（他集団の他者から，またはランダムに一人で作業をするように決められる）に対してより低い受容感を示す（拒絶感を感じる）ことを明らかにし，さらに，他集団の他者から受容・拒絶的な対応をされた場合に特に状態的自己評価を上昇・低下させることを示している。Stake, Huff, & Zand（1995）は，特定状況のシナリオを提示する方法で，低SE者が，ネガティブなイベント（社会的イベントおよび達成関連のイベント）を経験した場合に全体的自己評価を大きく変化させ，他の自己概念領域へのネガティブな一般化を行い，よりネガティブな感情を生起させることを示唆する結果を得ている。Katz, Beach, & Joiner（1998）は，恋人からの拒絶的な評価（自分の価値を低く評価される）に対し，低SEである女性が特に抑うつ的な反応を示すことを報告している。Sommer & Baumeister（2002）は，低SE者が，拒絶のプライミングに対し，自分自身をより低く（ポジティブ度を下げネガティブ度を上げるように）評価することで反応すること，一方で高SE者の自己評価は拒絶の影響を受けないことを明らかにしている（Study 1）。また，拒絶が低SE者の難問に対するあきらめの早さや高SE者の粘り強さを導くこと（Study 2），低SE者の遂行を阻むが，高SE者の遂行を有意には向上させないこと（Study 3）も同様の方法により明らかにされている。これらの知見は，対人的拒絶の効果が自尊心により調整され，自尊心が低いことが，拒絶後の自己評価や感情，行動などに特に強い効果をもたらすことを示すものである。

ただし，Downey & Feldman（1996, Study 3）では自尊心が拒絶の（傷つけようとする）意図と有意な関連を持たないことが明らかにされており（r=-.13），拒絶を感知すること自体には自尊心のレベルによる差がなく，拒絶後の反応（拒絶に対する対処）のみが自尊心レベルにより異なる可能性も残されている（Sommer & Baumeister, 2002）。また，Leary et al.（1998）の行った拒絶の操作が異なる4つの研究は，いずれも実験操作と自尊心の主効果しか示さず，両者の交互作用は見いだされていない。これは自尊心が拒絶の効果を調整するものではないことを示唆しており，上記の予測を支持していない。Learyらは，拒絶の効果に対する自尊心の影響について，さらなる検討が必要であると述べている。

拒絶過敏性　拒絶過敏性（rejection sensitivity: RS）は，重要な他者からの拒絶を不安とともに予期し，敏感に知覚し，拒絶に対して強く反応する傾向であり（Downy, Mougios, Ayduk, London, & Shoda, 2004 ; Levy, Ayduk, & Downey, 2001），関係性スキーマについての愛着理論と帰属理論の説明を選択的に援用して定義された構成概念である（Ayduk, Downey, Testa, Yen, & Shoda, 1999）。この傾向は過去の拒絶経験などにより拒絶への予期不安が形成され，それが拒絶の感じ取りやすさや，適応的でない認知・感情的反応，行動的反応を生み出すことによって，自己充足的に強化されていく（Levy et al., 2001; Figure 4）。RSは，期待価値理論（Bandura, 1986）に基づき，拒絶の起こり得る対人相互作用に関する18の仮想場面（例えば，“あなたはあなたの友人に大きな頼みごとをします”）について，その結果への関心や不安の強さ，相手が拒絶的な反応をする可能性の認知を問うことにより測定され（Downey & Feldman, 1996; Downey et al., 2004），拒絶の感じやすさを直接的に扱う概念であるといえる。

Downey & Feldman（1996）は，RSの高い人（高RS者）が，異性が会話中に示す曖昧な行動（楽しい10分の会話の後，相手が次の5分間の会話を続けたくないと言っていると告げられる）に対して拒絶の意図を感じやすいこと（Study 2）や，新しい恋人がとる行動（冷たく距離を置かれる，自分の行動に寛容でない，一緒に過

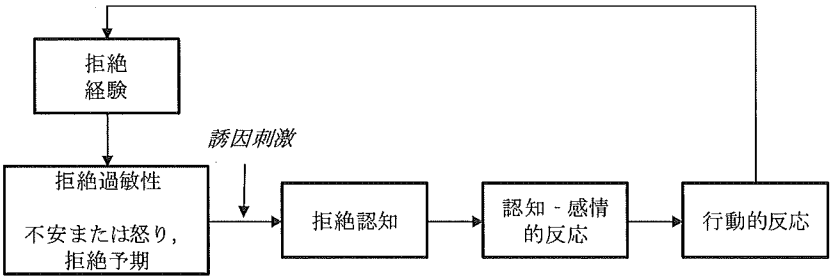

Figure 4　拒絶過敏性モデル（Levy et al., 2001をもとに作成）

ごす時間が減った）に対して意図的な拒絶を感じやすいこと（Study 3），交際後しばらく経つ恋人から拒絶や自分との関係に対する不満感を感じ取りやすいことを示している（Study 4）。

RSは拒絶を受けた後の敵意や抑うつの増加に関連することが示されている。Ayduk et al.（1999）は，高RSの女性が，拒絶をプライミングされた場合に敵意的情報にアクセスしやすくなること（Study 1），潜在的な恋人（プロフィール交換をした異性）から拒絶（やりとりを断られる）を受けた際，その人をポジティブに評価しないこと（Study 2），拒絶感を覚えたときにのみ恋人と喧嘩する傾向があること（Study 3）を示している。Ayduk, Downey, & Kim（2001）では，高RS者が恋人に別れを告げられたことにより抑うつ傾向を高めることを明らかにしている。

RSは対人的拒絶を意識した後の動機づけや行動にも影響することが示されている。Downey et al.（2004）は，拒絶をイメージさせる絵画を見せると，高RS者がより強く驚きの反応（瞬目の増加）を示すことを明らかにし，RSが自動的，自律神経的な反応を引き起こし，拒絶の積極的回避や闘争／逃走行動を迅速に動機づけることを示唆している。また，Downey, Freitas, Michaelus, & Khouri（1998）は，恋人同士を対象とした縦断的な調査（Study 1）および実験室での行動観察（Study 2）から，高RSの女性が，拒絶されるという予期をもつため，葛藤時に相手の受容的行動の減少や関係からの撤退を感じ取ること，葛藤の際自己充足的にネガティブな行動を行う傾向があり，その結果，恋人から拒絶的な反応（怒り，ひいては関係不満，関係を終わらせようという考え）を引き出すことを示唆している。Downey, Feldman, & Ayduk（2000）は，男性を対象にして恋愛関係に関する調査を行い，恋愛能力を重視しており，RSの高い男性が，恋人に対してより多くの身体的暴力を行うことを示している。さらに，Purdie & Downey（2000）は，6年生から8年生を対象とした縦断的な面接調査の結果，1回目調査時に高RSと判定された少女が，2回目調査時までにボーイフレンドをつなぎとめるために，間違っていると思うことでも進んで行っていたことを見出している。

自己愛　自己愛の高い人は，対人的拒絶に対して高い反応性を示すことが指摘されている（Twenge & Baumeister, 2005）。Twenge & Campbell（2003）は，過去経験の想起による方法（Study 1）と，他者選択による方法（Study 2-4）で，対人的拒絶を受けた場合に生じる感情と自己愛との関連を検討し，その結果，自己愛が，拒絶後の拒絶した相手に対する怒りや攻撃（不快な雑音を聞かせる）や第三者に対する転移性攻撃を有意に予測することを示している。Exline, Baumeister, Bushman, Campbell, & Finkel（2004）は，自己愛的な権利の主張性を高くもつ人が，自分を傷つけるような行為（Study 1：自ら経験を想起させたもの，Study 2：設定されたシナリオ，Study 5：実験的な状況において提示された敵意的なメッセージなど）を行った人に対して，より許し難さを感じたり，敵意的な行動をとることを示している。Bushman, Bonacci, van Dijk, & Baumeister（2003, Study 3）は，自己愛の高い男性が，性的な一節を被験者に向かって読むはずの女性が途中でそれを中止したときに，自分の場合にだけ中止されたと受け取るため，その女性に対する攻撃傾向を高めることを示している。また，Rhodewalt, Madrian, & Cheney（1998）は，ポジティブ，ネガティブな対人イベントが，自己愛者における5日間（Study 1）ないし6日間（Study 2）の感情や自尊心の変動に与える影響を検討し，高自己愛者において，ネガティブな対人イベント（家族，友人，恋人，同僚などとの問題）を経験した場合の自尊心（Study 1-2）や感情（Study 1）の変動が大きくなることを示している。

対人的拒絶の影響に関するモデル

対人的拒絶が行動面，認知面，感情面に及ぼす影響は，大別すると向社会的な反応と反社会的な反応にまとめることができる（Figure 5）。向社会的な反応は，所属欲求を回復することを目的とするプロセスとして考えられる。このプロセスでは，関係評価の低さに対する不安が生じ，社会的手がかりへの注意や他者への肯定的な評価が促され，新たな関係を形成しようとする行動が生じる。これらの反応は，ソシオミーター理論（Leary et al., 1995）や社会的追放のモデル（Williams & Gerber, 2005），社会的監視システム（Pickett & Gardner, 2005）などで捉えられている。一方，反社会的な反応が生じるプロセスでは，怒りが喚起され，他者を否定的に評価し，攻撃的な行動が生じる。対人的拒絶後の反社会的な反応は，社会的傷み理論（MacDonald & Leary, 2005）や自己本位性脅威モデル（Baumeister et al., 1996）によって説明される。いずれのプロセスにおいても共通している点は，対人的拒絶によって所属欲求が阻害され，自尊心が低下することである。

向社会的な影響プロセスと反社会的な影響プロセスは，異なる方向性をもつものである。いずれのプロセスが生じるかは，自己調整能とパーソナリティ要因によって規定される。対人的拒絶によって自己調整能力が阻害されれば，攻撃などの反社会的な反応が増加するが，自己調整を行うことができれば，関係を維持するように働きかけるなど向社会的な反応が促されることが予想される。対人的拒絶を経験した後に，攻撃的な衝動を抑制し，

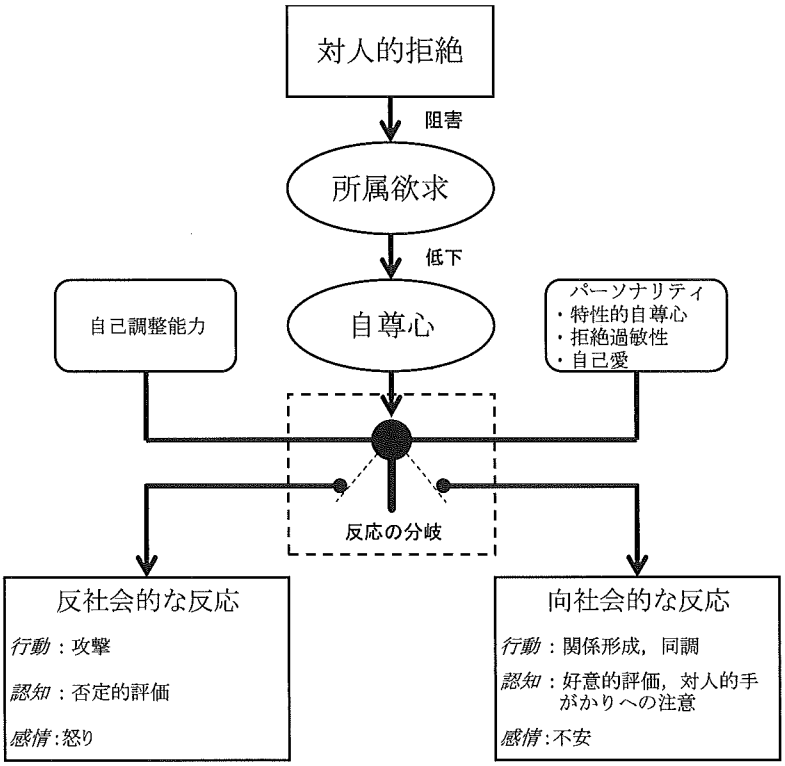

Figure 5　対人的拒絶から向社会的な反応と反社会的な反応が生じるプロセス

他者に対して向社会的に働きかけるように自己を調整できるか否かは，自己調整能力の個人差によるところが大きい。また，特性的自尊心や拒絶過敏性，自己愛などのパーソナリティ要因のあり方によって，向社会的な反応が生じるか反社会的な反応が生じるかが規定される。特性的自尊心の高いものは，他者からの受容に対する安定的な信念をもっているために（Leary et al., 1995），対人的拒絶を経験した際に向社会的に振る舞うことで関係を再構築しようとすると考えられる。拒絶過敏性や自己愛の高いものは，対人的拒絶を経験した際に，怒り感情の生起や攻撃行動などの反社会的な反応を生じやすい。対人的拒絶の影響に関しては，向社会的な反応と反社会的な反応のいずれを導くかという二項対立的な捉え方ではなく，自己調整能力やパーソナリティ要因によっていずれの反応も生じ得ると考えるのが妥当であろう。

今後の課題

本論文では，対人的拒絶に関して，概念的定義，理論的枠組み，実験場面における操作方法，その影響について概観した。ここまでみてきたように，対人的拒絶に関する研究知見は，膨大であるがために整合性を欠く面もあり，さらなる知見の統合や理論的な考察，あるいは補完的な実証知見が求められる。

この研究領域における今後の課題として，次の3点を指摘したい。1点目に，対人的拒絶のタイプを弁別したうえで，その影響を検討することである。これまでの実験研究では，様々な操作方法が用いられてきているが，その質的な差異について積極的に論じられることは少なかった。近年，Leary（2005）やWilliams & Zadro（2005）によって，対人的拒絶の次元やタイプに関する弁別の必要性が指摘されているものの，その検証はまだあまり行われていない。実験場面における操作方法の質的な差異を考慮しながら，対人的拒絶をより精緻化して捉える必要がある。

2点目に，対人的拒絶の効果を調整する要因を明らかにする必要がある。本論文では，拒絶過敏性や特性的自尊心などのパーソナリティによって，対人的拒絶の効果が異なる可能性を指摘した。また，拒絶経験後に向社会的な反応が生じるか，反社会的な反応が生じるかは，自己調整能力によって規定されることを論じた。これらの個人差変数に注目することは，対人的拒絶が及ぼす影響を予測するうえで有意義である。その一方で，これらの要因の検討は，介入的な面での示唆にはつながりにくい。対人的拒絶が攻撃行動などの不適応的な結果を生じない

ようにするためには，どのような介入方法があるかを検討することも必要であろう。例えば，Twenge, Zang, Catanese, Dolan-Pascoe, Lyche, & Baumeister (2007) は，対人的拒絶を経験した参加者に対して，家族や友人のことを思い出させることで，攻撃行動が低下することを明らかにしている。また，Warburton et al. (2006) は，対人的拒絶の後に，不快な出来事をコントロールできるという経験をすると，攻撃行動は高まらないことを報告している。このように，対人的拒絶の影響を緩衝し得る外的な要因を検討することで，不適応的な行動パターンを抑制する介入的な方策への示唆が得られると考えられる。

3点目に，実験場面における研究知見を他の領域での研究知見と統合していくことである。本論文で概観した実験社会心理学的な研究とは別に，発達心理学や教育心理学の領域では，主に児童を対象として，仲間や友人からの拒絶が不適応的な結果と結びつくことが知られている (Birch & Ladd, 1996; Juvonen & Gross, 2005)。実験社会心理学的な研究では，主に青年を対象とした基礎研究が行われ，発達心理学や教育心理学の領域では，児童を対象としたフィールドワーク的な研究が多くなされている。日常の具体的な場面においても，青年や成人を対象とした研究を行うとともに，実験場面における知見を学校場面などに応用していくことが必要である。

引用文献

Ayduk, Ö., Downey, G., & Kim, M. (2001). Rejection sensitivity and depressive symptoms in women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 868-877.

Ayduk, Ö., Downey, G., Testa, A., Yen, Y., & Shoda, Y. (1999). Does rejection elicit hostility in rejection sensitive women? *Social Cognition*, 17, 245-271.

Ayduk, Ö., Gyurak, A., & Luerssen, A. (2008). Individual differences in the rejection-aggression link in the hot sauce paradigm: The case of rejection sensitivity. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 775-782.

Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action.* Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Baumeister, R. F., & DeWall, N. (2005). The inner dimension of social exclusion: Intelligent thought and self-regulation among rejected persons. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying.* New York: Psychology Press. Pp.53-73.

Baumeister, R. F., DeWall, N., Ciarocco, N. J., & Twenge, J. M. (2005). Social exclusion impairs self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 589-604.

Baumeister, R. F., & Leary, M R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachment as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.

Baumeister, R. F., & Stillman, T. F. (2008). Self-regulation and close relationships. In J. V. Wood, A. Tesser, & J. G. Holmes (Eds.), *The self and social relationships.* New York: Psychology Press. Pp.140-158.

Baumeiter, R. F., Tice, D., M., & Hutton, D. G. (1989). Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, 57, 547-579.

Baumeister, R. F., Twenge, J. M., & Nuss, C. K. (2002). Effects of social exclusion on cognitive processes: Anticipated aloneness reduces intelligent thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 817-827.

Birch, S. H., & Ladd, G. W. (1996). Interpersonal relationships in the school environemt and children's early school adjustment: The role of teachers and peers. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation: Understanding children's school adjustment.* UK: Cambridge University Press. Pp.199-225.

Blackhart, G. C., Eckel, L. A., & Tice, D. M. (2007). Salivary cortisol in response to acute social rejection and acceptance by peers. *Biological Psychology*, 75, 267-276.

Bourgeois, K. S., & Leary, M. R. (2001). Coping with rejection: Derogating those who choose us last. *Motivation and Emotion*, 25, 101-111.

Bratslavsky, E., Baumeister, R. F., & Sommer, K. L. (1998). To love or be loved in vain: The trials and tribulations of unrequited love. In B. H. Spitzberg & W. R. Cupach (Eds.), *The dark side of close relationships.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Pp.307-326.

Briones, E., Tabernero, C., & Arenas, A. (2007). Effects of disposition and self-regulation on self-defeating behavior. *Journal of Social Psychology*, 147, 657-679.

Buckley, K. E., Winkel, R. E., & Leary, M. R. (2004). Reactions to acceptance and rejection: Effects of level and sequence of relational evaluation. *Journal of Experimental Psychology*, 40, 14-28.

Buhrmester, D. (1996). Need fulfillment, interpersonal competence, and the developmental contexts of early adolescent friendship. In W. M Bukowski, A. F. Newcomb, & W. W. Hartup (Eds.), *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. Pp.158-185.

Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threated egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.

Bushman, B. J., Bonacci, A. M., van Dijk, M., & Baumesiter, R. F. (2003). Narcissism, sexual refusal, and aggression: Testing a narcissistic reactance model of sexual coercion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 1027-1040.

Case, T. I., & Williams, K. D. (2004). Ostracism: A metaphor for death. In J. Greenberg, S. L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press. Pp.336-351.

Catanese, K. R., & Tice, D. M. (2005). The effects of rejection on anti-social behaviors: Social exclusion produces aggressive behaviors. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. Pp.297-306.

Chow, R. M., Tiedens, L. Z., & Govan, C. L. (2008). Excluded emotions: The role of anger in antisocial responses to ostracism. *Journal of Experimental Psychology*, 44, 896-903.

Ciarocco, N., Sommer, K. L., & Baumeister, R. F. (2001). Ostracism and ego depletion: The strains of silence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1156-1163.

Cole, T., & Leets, L. (1999). Attachment styles and intimate television viewing. Insecurity forming relationships in a parasocial way. *Journal of Social and Personal Relationships*, 16, 495-511.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.

DeWall, C. N., & Baumeister, R. F. (2006). Alone but feeling no pain: Effects of social exclusion on physical pain tolerance and pain threshold, affective forecasting, and interpersonal empathy. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 1-15.

Downey, G., & Feldman, S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343.

Downey, G., Feldman, S., & Ayduk, Ö. (2000). Rejection sensitivity and male violence in romantic relationships. *Personal Relationships*, 7. 45-61.

Downey, G., Freitas, A. L., Michaelis, B., & Khouri, H. (1998). The self-fulfilling prophecy in close relationships: Rejection sensitivity and rejection by romantic partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 545-560.

Downey, G., Mougios, V., Ayduk, O., London, B., & Shoda, Y. (2004). Rejection sensitivity and the defensive motivational system: Insights from the startle response to rejection cues. *Psychological Science*, 15, 668-673.

Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., & Williams, K. D. (2003). Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, 302, 290-292.

Exline, J. J., Baumeister, R. F., Bushman, B. J., Campbell, W. K., & Finkel E. J. (2004). Too proud to let go: Narcissistic entitlement as a barrier to forgiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 894-912.

Eysenck, H. J., & Eysenck, S. B. G. (1975). *Manual of the Eysenck Personality Questionnaire*. San Diego, CA: EDTS.

Gaertner, L., Iuzzini, J., & O' Mara, E. M. (2008). When rejection by one fosters aggression against many: Multiple-victim aggression as a consequences of social rejection and perceived groupness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 958-

970.

Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Brewer, M. (2000). Social exclusion and selective memory: How the need to belong influences memory for social events. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 486-496.

Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Knowles, M. (2005). Social snacking and shielding: Using social symbols, selves, and surrogates in the service of belonging needs. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying.* New York: Psychology Press. Pp.227-241.

Gonsalkorale, K., & Williams, K. D. (2006). The KKK won' t let me play: Ostracism even by a despised outgroup hurts. *European Journal of Social Psychology*, 37, 1176-1186.

Harter, S., Whitesell, N. R., & Junkin, L. J. (1998). Similarities and differences in domain-specific and global self-evaluations of learning-disabled, behaviorally disordered, and normally achieving adolescents. *American Educational Research Journal*, 35, 653-682.

Hazan, C., & Shaver, P. R. (1994). Attachment as an organizational framework for research on close relationships. *Psychological Inquiry*, 5, 1-22.

Juvonen, J., & Gross, E. F. (2005). The rejected and the bullied: Lessons about social misfits from developmental psychology. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying.* New York: Psychology Press. Pp.155-170.

Katz, J., Beach, S. R., & Joiner, T. E. (1998). When does partner devaluation predict emotional distress? Prospective moderating effects of reassurance-seeking and self-esteem. *Personal Relationships*, 5, 409-421.

Krill, A. L., Platek, S. M., & Wathne, K. (2008). Feelings of control during social exclusion are partly accounted for by empathizing personality. *Personality and Individual Differences*, 45, 684-688.

Leary, M. R. (2001). Toward a conceptualization of interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection.* New York: Oxford Press. Pp. 3-20.

Leary, M. R. (2004a). The function of self-esteem in terror management theory and sociometer theory: Comment on Pyszczynski et al. (2004). *Psychological Bulletin*, 130, 478-482.

Leary, M. R. (2004b). The self we know and the self we show: Self-esteem, self-presentation, and the maintenance of interpersonal relationships. In M. B. Brewer & M. Hewstone (Eds.), *Emotion and motivation.* Oxford, UK: Blackwell Publishing.

Leary, M. R. (2005). Varieties of interpersonal rejection. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying.* New York: Psychology Press. Pp.35-51.

Leary, M. R. (2008). Functions of the self in interpersonal relationships: What does the self actually do? In J. V. Wood, A. Tesser, & J. G. Holmes (Eds.), *The self and social relationships.* New York: Psychology Press. Pp.95-115.

Leary, M. R., Gallagher, B., Fors, E., Buttermore, N., Baldwin, E., Kennedy, K., & Mills, A. (2003). The invalidity of disclaimers about the effects of social feedback on self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 623-636.

Leary, M. R., Haupt, A. L., Strausser, K. S., & Chokel, J. T. (1998). Calibrating the sociometer: The relationship between interpersonal appraisals and state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1290-1299.

Leary, M. R., Koch, E. J., & Hechenbleikner, N. R. (2001). Emotional responses to interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection.* New York: Oxford Press. Pp. 145-166.

Leary, M. R., Kowalski, R. M., Smith, L., & Phillips, S. (2003). Teasing, rejection, and violence: Case studies of the school shootings. *Aggressive behavior*, 29, 202-214.

Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 518-530.

Leary, M. R., Twenge, J. M., & Quinlivan, E. (2006). Interpersonal rejection as a determinant of anger and aggression. *Personality and Social Psychology Review*, 10, 111-132.

Levy, S. R., Ayduk, Ö., & Downey, G. (2001). The role of rejection sensitivity in people' s relationships

with significant others and valued social groups. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection*. New York: Oxford Press. Pp. 251-289.

MacDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt? The relationship between social and physical pain. *Psychological Bulletin*, 131, 202-223.

Mahon, N. E., Yarcheski, A., Yarcheski, T. J., Cannella, B. L., & Hanks, M. M. (2006). A meta-analytic study of predictors for loneliness during adolescence. *Nursing Research*, 55, 308-315.

Maner, J. K., DeWall, N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection?: Resolving the "porcupine problem" *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 42-55.

Maslow, A. H. (1968). *Motivation and personality*. New York: Harper & Row.

Mayer, J. D., & Gaschke, Y. N. (1988). The experience and meta-experience of mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 102-111.

Mikulincer, M., Florian, V., & Hirschberger, G. (2004). The terror of death and the quest for love: An existential perspective on close relationships. In J. Greenberg, S. L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press. Pp.287-304.

Murray, S. L., Rose, P., Bellavia, G. M., Holmes, J. G., & Kusche, A. G. (2002). When rejection stings: How self-esteem constraints relationship-enhancement processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 556-573.

Nezlek, J. B., Kowalski, R. M., Leary, M. R., Blevins, T., & Holgate, S. (1997). Personality moderators if reactions to interpersonal rejection: Depression and trait self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1235-1244.

Parker, J. G., & Asher, S. R. (1987). Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.

Peterson, C., & Seligman, M. E. (1994). Causal explanations as a risk factor for depression: Theory and evidence. *Psychological Review*, 91, 347-374.

Pickett, C. L., & Gardner, W. L. (2005). The social monitoring system: Enhanced sensitivity to social cues as an adaptive response to social exclusion. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. Pp.213-226.

Pickett, C. L., Gardner, W. L., & Knowles, M. (2004). Getting a cue: The need to belong and enhanced sensitivity to social cues. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 1095-1107.

Purdie, V., & Downey, G. (2000). Rejection sensitivity and adolescent girls' vulnerability to relationship-centered difficulties. *Child Maltreatment*, 5, 338-349.

Rhodewalt, F., Madrian, J. C., & Cheney, S. (1998). Narcissism, self-knowledge, organization, and emotional reactivity: The effect of daily experience on self-esteem and affect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 75-87.

Rudman, L. A., Dohn, M. C., & Fairchild, K. (2007). Implicit self-esteem compensation: Automatic threat defense. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 798-813.

Sedikides, C., Rudich, E., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbult, C. (2004). Are normal narcissists psychologically healthy? Self-esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 400-416.

Segrin, C., & Kinney, T. (1995). Social skills deficits among the socially anxious: Rejection from others and loneliness. *Motivation and Emotion*, 19, 1-24.

Sheldon, K. M., Elliot, A. J., Kim, Y., & Kasser, T. (2001). What is satisfying events? Testing 10 candidate psychological needs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80, 325-339.

Snapp, C. M., & Leary, M. R. (2001). Hurt feelings among new acquaintances: Moderating effects of interpersonal familiarity. *Journal of Personal and Social Relationships*, 18, 315-326.

Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (2004). The cultural animal: Twenty years of terror management theory and research. In J. Greenberg, S. L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press. Pp.13-34.

Sommer K. L., & Baumeister, R. F. (2002). Self-Evaluation, persistence, and performance following

implicit rejection: The role of trait self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 926-938.

Stake, J. E., Huff, L., & Zand, D. (1995). Trait self-esteem, positive and negative events, and event-specific shifts in self-evaluation and affect. *Journal of Research in Personality*, 29, 223-241.

Swann, W. B., Jr., Chang-Schneider, C., & Angulo, S. (2008). Self-verification in relationships as an adaptive process. In J. V. Wood, A. Tesser, & J. G. Holmes (Eds.), *The self and social relationships*. New York: Psychology Press. Pp.49-72.

Swann, W. B., Jr., Pelham, B. W., & Krull, D. S. (1989). Agreeable fancy or disagreeable truth? How people reconcile their self-enhancement and self-verification needs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 782-791.

Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation model of social behavior. In Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol.20. New York: Academic Press. Pp.181-227.

Twenge, J. M., & Baumeister, R. F. (2005). Social exclusion increasing aggression and self-defeating behavior while reducing intelligent thought and prosocial behavior. In D. Abrams, M. A. Hogg, & J. M. Marques (Eds.), *The social psychology of inclusion and exclusion*. New York: Psychology Press. Pp.27-46.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciarocco, N. J., & Bartels, J. M. (2007). Social exclusion decrease prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 56-66.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Stucke, T. S. (2001). If you can' t join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1058-1069.

Twenge, J. M., & Campbell, W. K. (2003). "Isn' t it fun to get the respect that we' re going to deserve?" Narcissism, social rejection, and aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 261-272.

Twenge, J. M., Catanese, K. R., & Baumeister, R. F. (2002). Social exclusion causes self-defeating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 606-615.

Twenge, J. M., Zang L., Catanese, K. R., Dolan-Pascoe, B., Lyche, L. F., & Baumeister, R. F. (2007). Replenishing connectedness: Reminders of social activity reduce aggression after social exclusion. *British Journal of Social Psychology*, 46, 205-224.

van Beest, I., & Williams, K. D. (2006). When inclusion costs and ostracism pays, ostracism still hurts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 918-928.

VerSchueren, K., & Marcoen, A. (2002). Perceptions of self and relationship with parents in aggressive and nonaggresive rejected children. *Journal of School Psychology*, 40, 501-522.

Vohs, K. D., & Baumesiter, R. F. (2004). Ego depletion, self-control, and choice. In J. Greenberg, S. L. Koole, & T. Pyszczynski (Eds.), *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press. Pp.398-410.

Warburton, W. A., Williams, K. D., & Cairns, D. R. (2006). When ostracism leads to aggression: The moderating effects of control deprivation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 213-220.

Watson, D., Clark, L. A., &Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measure of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1063-1070.

Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748-762.

Williams, K. D., & Gerber, J. (2005). Ostracism: The making of the ignored and excluded mind. *Interaction Studies*, 6, 359-374.

Williams, K. D., & Sommer, K. L. (1997). Social ostracism by coworkers: Does rejection lead to loafing or compensation? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 693-706.

Williams, K. D. & Zadro, L. (2005). The indiscriminate early detection system. In K. D. Williams, J. P. Forgas & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying*. New York: Psychology Press. Pp.19-34.

Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. (2004). How low can you go? Ostracism by a computer is suf-

ficient to lower self-reported levels of belonging, control, self-esteem and meaningful existence. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 560-567.

Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. (2005). Riding the 'O' train: Comparing the effects of ostracism and verbal dispute on targets and sources. *Group Processes and Intergroup Relations*, 8, 125-143.

Zeigler-Hill, V., & Showers, C. J. (2007). Self-structure and self-esteem stability: The hidden vulnerability of compartmentalization. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 33, 143-159.

(2008年11月5日受稿)

ABSTRACT

An Overview of Researches on Interpersonal Rejection: Findings in the Field of Experimental Social Psychology

Ryo OKADA and Rumiko NAKAYAMA

In recent years, a plenty of researches on interpersonal rejection has emerged in the field of experimental social psychology. The purpose of this article was to synthesize the findings through the literature review. First, the definition of interpersonal rejection was examined from the view of relational value. Second, several theoretical frameworks capturing the interpersonal rejection, need to belong theory, sociometer theory, a model of social ostracism, social monitoring system, social pain theory, and threatened egotism model, were introduced. Third, a variety of experimental manipulations of interpersonal rejection was compared in terms of five dimensions, prior belonging status, evaluative valence, behavioral disassociation, comparative versus noncomparative judgment, and rejection period. Fourth, the behavioral, cognitive, and affective consequences of interpersonal rejection were examined, and an integrative model was proposed. Finally, future directions were suggested.

Key words: interpersonal rejection, need to belong, self-esteem, experimental social psychology